



拓北・あいの里地区社協ミニ通信

拓北・あいの里地区社会福祉協議会

会長：渡邊 寛 広報部長：森下 満

この広報紙は赤い羽根共同募金の支援を受けています

No 108

令和 8年 4月 22日

**4月8日(水)に社協常任理事会が行われました。
各部の活動状況と今後の予定についてご報告します。**

当地区では3月下旬に積雪ゼロを記録し、クロッカス、水仙等の春の草花が早々に開花しました。市内ではツツジも桜も開花しました。春爛漫です。

■ ボランティア企画部より ■

- ・ 拓北あいの里地区生活支援推進連絡会を実施しました。

3月19日(木) 17時30分から18時、地区センター2階福まちの部屋で、生活支援ボランティア登録者6名、北区社協2名(佐竹次長、生活支援コーディネーター・池田さん)、渡邊会長、柴田副会長の10名が参加しました。池田さんから生活支援推進連絡会とは「5年後・10年後も住み慣れている地域で生活し続けられるよう、地域の皆さんと一緒に気軽に意見交換を行う場」であること、そのお手伝い役の「生活支援コーディネーター」の役割・取り組みの説明があり、柴田副会長から当地区社協の「サポートたくあい」の活動状況の説明があり、参加者全員で意見交換を行いました。

- ・ 生活支援ボランティア活動の実施状況。

3月中旬から4月上旬にかけて、高齢男性から室内清掃の2件の依頼があり、実施しました。

■ 総務部より ■

- ・ 当会全部員対象の福祉をテーマにした研修会と、率直な意見交換の機会として懇談会を開催しました。

3月19日(木) 18時から20時30分、地区センター2階集会室A・Bで、参加者は26名。全体研修では「拓北・あいの里地区の現況について」と題し、拓北・あいの里まちづくりセンター所長・佐々木俊晃様にご講演いただきました。内容は、拓北・あいの里地区の人口の推移、まちセン区域別老年人口率及び持ち家率、年齢構成(全市との比較、地区別の比較)、条丁目別高齢化率などの統計データが紹介された上で、当地区では今後さらなる高齢化が予測され、それに伴う様々の問題への対応が課題となる、と報告されました。

- ・ 令和8年度定期総会が5月30日(土)14時から、地区センター1階多目的ホールで開催予定です。

内容は令和7年度の報告事項―事業報告、決算報告、監査報告、令和8年度の事業計画案、予算案、についてです。

■ ふれあい交流部より ■

- ・ 4月9日(木)のひまわりクラブは地区センター和室A・Bに4組12名の親子さん(親御さん6名、お子さん6名)が参加され、自由遊び、絵本の読み聞かせ、誕生日プレゼントの贈呈を楽しまれました。



10名が参加した、3月19日の拓北あいの里地区生活支援推進連絡会の様子。



26名が参加した、3月19日の地区社協部員研修会及び懇談会の様子。



4組12名の親子さんたちが参加した、4月9日のひまわりクラブ。絵本の読み聞かせをしている様子。



地区センター17名、オンライン0名、合計17名が参加した、3月17日の地域ケア部の例会。

[裏につづく ➡]

次回のひまわりクラブは5月14日(木)10:00~11:30、地区センター和室A・Bにて開催予定です。

■ 地域ケア部より ■

3月例会は17日(火)18:30~20:00、地区センター2階集会室にて、拓北あいの里ケア施設町内会事務局長の長谷川聡(はせがわ・さとし)をゲストに「町内会 DX化で何が変わる?」をテーマに話題提供をいただき、意見交換を行いました。

地区センターでの対面とオンラインでのハイブリッド方式で行われ、参加者は地区センター17名、オンライン0名、合計17名。

DXとは、Digital Transformation (デジタル・トランスフォーメーション)の略で、DX化とは、デジタル技術を活用し、業務プロセスやビジネスモデル、組織文化までを変革し、競争優位性を確立すること、また単なるIT(業務効率化)に留まらず、新たな価値創出や顧客体験の向上を目指す経営戦略である、とAI(人工知能)は示し、特にビジネス界では重要な概念です。

DTとせずDXとしたのは、Transにはクロスという意味があり、Xはクロスする、チェンジする、をあらわしているから、だそうです。

では、町内会 DX化で何が変わるのか、といえば、何も変わらない、と長谷川さんは結論づけました。DX化はあくまでも道具、手段であり、使い方次第のもので、町内会をどうしたいのか、町内会で何をしたいのか、といった目的が最初であり、そのために必要なDX化を図るという姿勢が大事である。

町内会のDX化は、仕事量が増えるなど、むしろマイナス面が大きい可能性がある。AIのデモンストラレーションも兼ねて、Gemini3に「町内会デジタル化の課題と対策」で検索すると、以下の4点が示されました。

- 1.情報格差(デジタル・デバイド)の拡充：スマートフォンを使いこなす世代と、電話・回覧板を好む世代での格差。
- 2.セキュリティと個人情報の管理：デジタル化に伴う名簿管理やセキュリティへの不安。
- 3.コストと導入・運用の負担：誰が設定し、誰が操作を教えるのかという属人化の問題。
- 4.コミュニケーションの質の変化：ツールが乱立し、必要なマニュアルやデータが見つからない、または情報共有が遅れる。

上手なDX化を行った事例として、東京都日野市の南新井自治会では、LINEとGoogleフォームを活用した「デジタル安否確認訓練」を導入し、外出先からでも迅速に安否報告ができる体制を構築しました。低コストかつ実効性の高い防災DXの先進事例として注目されています。

また、町内会の歴史をみると、関東大震災(1923年)が東京を中心に町内会が急速に普及・組織化された最大の契機となったことがあげられます。震災直後の混乱期における、①自警—震災の恐怖と混乱の中で、隣保団結を緊密にする必要性から、多くの地域で自警団が自主的に結成された—、②災害救援・復旧—避難者の救護、炊き出し、物資配給などを実施し、被災地での救援・復旧活動の中心的な役割を担った—、③消防—下町の木造家屋が密集する地区で、神田は町内会の消防活動により、唯一と言ってよいほどに焼け残ったまちと言われている—、のための団体として機能し、昭和初期にかけて地域住民組織として確立し、現代の町内会の基礎となったのです。

このような先進事例や歴史に学ぶなら、社会的弱者の安否確認や災害時に役立つ情報づくりを目的に、DX化を図るのは一つの方向性としてあると思います。地域社会の防犯・防災に関わる課題への取り組みは、現在の町内会活動の基盤でもあります。

なお、4月例会は21日(火)18:30~20:00、地区センター2階集会室にて、SOMPOケア札幌福祉用具・丸山 裕之介(まるやま・ゆうのすけ)さんをゲストに「SOMPOケアの提供する福祉用具サービス」をテーマに、話題提供をいただき、意見交換を行いました。その内容については次号の109号で報告いたします。

◇ 今後の予定 ◇

5月例会は19日(火)18:30~20:00、地区センター2階集会室にて、ケア施設町内会事務局長・長谷川聡(はせがわ・さとし)をゲストに「ケア施設町内会のこれから」意見交換会をテーマに、話題提供をいただき、意見交換を行う予定です。

5月例会はオンライン参加希望の方があればハイブリッド開催いたします。開催日前週の金曜日までに当会事務局・長谷川までメール takuai.jimu@gmail.com でその旨をお知らせください。